

古ポルトガル語における鼻母音の表記法

A notação das vogais nasais no português antigo

黒澤 直俊

Naotoshi KUROSAWA

0. はじめに

ポルトガル語の二重鼻母音¹⁾の成立については比較的多くの研究が行われてきた。Lipski 1973 や Lorenzo 1988, Castro 1991 pp.244-245 などがこのあたりの事情については詳しいが、こまかな点で様々な解釈があることがわかる。ところが、近年になって、Sampson 1983, Carvalho 1989 など、この問題に関する重要な研究が発表された。筆者には、特に Carvalho 1989 が画期的であると思われるが、このふたつの研究は、いずれも、従来見られたような根拠に欠けるあいまいな説明を排し、今まであまりはっきりとは触れられてこなかった、この音変化に関わるクロノロジーを鮮明にしたという点ですぐれている。しかし、彼らの説にも問題がないわけではなく、事実、両者には原理的に大きな開きが存在する。最近、発表された Sampson 1999 を見ても主張はくいちがったままであるが、本論は、このような最近の研究に踏まえながら、この二重鼻母音の成立に関わる音韻史の本質的な問題を明らかにし、同時に Sampson 1983 や Carvalho 1989 が行なわなかった、中世語の写本の表記上の資料とのつき合わせを試みたものである。

1. 基本的な音韻史とその解釈

ポルトガル語は15世紀を境として大きく分けられ、それ以前を古ポルトガル語、16世紀以降を近代ポルトガル語などと呼ぶ。²⁾ これは15世紀、すなわち1400年代に重要な言語変化が集中しているためである。この背景として、現在もなお、ポルトガルは南北の方向に方言連続体を形成しているが、特に16世紀にかけて、国の政治的、社会的中心がそれまでのように北部だった時代から、現在のような中南部地域を中心とする体制へ移行したことなどが考えられる。いわば、中世的な世界が終了し、ルネッサンス的な都市文化の表現手段となるのが近代ポルトガル語であるが、二重鼻母音は15世紀に起った変化によって成立したもので、それ以前には見られない特徴である。一方、単鼻母音については、古ポルトガル語に [ĩ] / [ẽ] / [ē] / [õ] / [ũ] の存在を疑問視する研究者は今のところ見当たらない。³⁾ 鼻母音は、音節末の鼻子音や音節を異にする鼻子音 N が先行する母音を鼻音化したことで生じたもので、そのうち、音節を異にする鼻子音 N、すなわち母音間の-N- は11世紀から12世紀にかけて脱落したことがわかっているため、その段階以降、単鼻母音のうち、少なくともその一部はすでに存在していなければならないからである。

現代語における状態を出発点として、通時的な観点を交え、単鼻母音と二重鼻母音についての概要をまとめると次のようになる。

1) 単鼻母音は現代語で語中、語末に分布しているが、語末には [ẽ] のみ現れない。

① 語中の単鼻母音は音節末の鼻子音が先行母音を鼻音化したことによって生じたもので、この変化はかなり早い時機に起こったとされているが、さらに、この鼻子音がいつ消失したかということも問題である。(例: canto > cānto > cāto) 現代語でも鼻母音と後続する閉鎖音の間にわたり音として鼻子音が聞かれることもあるが、単鼻母音+閉鎖子音と解釈するのが一般的である。これらが古ポルトガル語で単鼻母音ですでに鼻子音が失われていたとすれば、現代語と同じ状態だったことになる。後で触れる綴り字調査の語中の例はこれに該当する。この位置では、綴り字から音の変化を窺い知る決定的な方法がないので、古ポルトガル語での単鼻母音の存在はあくまで仮定であり、単鼻母音+鼻子音または単母音+鼻子音の可能性も考えられなければならない。以下の例では左端の項が現代ポルトガル語、中間に古ポルトガル語での可能性、そして右端に大文字でラテン語の語源を示す。

quinto [ĩ] < quinto [ĩ]~[ĩn]~[in] < QUINTUM sempre [ẽ] < sempre [ẽ]~[ẽm]~[em] < SEMPER
campo [ẽ] < campo [ẽ]~[ẽm]~[em] < CAMPUM conto [õ] < conto [õ]~[õn]~[on] < CONTUM
mundo [ũ] < mundo [ũ]~[ũn]~[un] < MUNDUM

② 語末に現れる単鼻母音には語源的に2つのタイプがある。①と同様に音節末の、ただし、この場合は語末の鼻子音の鼻音化によるもので、古ポルトガル語で単鼻母音であったか、あるいは前述のように単鼻母音+鼻子音または単母音+鼻子音と推定されるものと、その段階では単鼻母音+口母音であったことが「かなり確実に」特定できるものの2つである。この単鼻母音+口母音の連続は、前述の母音間の -N- の脱落によって生じたもので、結果的に15世紀頃まで母音接続 hiatus を形成して2音節であったが、その頃に起こった母音接続の縮合現象によって現在のような1音節の単鼻母音となったとされている。(例: irmana > irmāna > irmā·a > irmã)

i) 単鼻母音(?) : fin [ĩ] < fin [ĩ]~[ĩn]~[in] < FINEM um [ũ] < um [ũ]~[ũn]~[un] < UNUM
ii) 単鼻母音+口母音: irmã [ẽ] < irmã·a < GERMANAM bom [õ] < bõ·o < BONUM

2) 二重鼻母音は原則として語末に現れるが、通時的な観点から次の3つのタイプに分けることが出来る。

③ 古ポルトガル語で単鼻母音+母音であったと考えられるもので、これらは母音間の -N- の消失、母音接続の解消という上で触れたプロセスを経て形成されたものである。この場合、母音接続の解消の仕方は、上の②- ii)とは異なり二重母音化という形をとる。

mão [vũ] < mã·o < MANUM pães [vẽ] < pã·es < PANES ladrões [õ] < ladrõ·es < LATRONES

④ ①, ②- i)と同じタイプの音節末の鼻子音の鼻音化によるもので、古ポルトガル語では単鼻

母音または単(鼻)母音＋鼻子音であったと考えられるもの。

amam [ēū] < aman [ē]~[ēn]~[en] < AMANT foram [ēū] < foron [ō]~[ōn]~[on] < *?FORUNT
pão [ēū] < pan [ē]~[ēn]~[en] < PANEM bem [ē] (< [ē]) < ben [ē]~[ēn]~[en] < BENE ⁴⁾

⑤ 以上の例と異なり鼻母音の起源が音節末の鼻子音または母音間の -N- でないもの。次の例では語頭の鼻子音 M- が母音の鼻音化をもたらしたと考えられている。

mãe [ē] < mai (> ガリシア語では nai) < madre < MATREM muito [ū] < MULTUM

このうち、②- ii)と③の例での母音接続の解消は同じ時期に起ったと仮定される。古ポルトガル語には語中の有声子音の脱落によって生じた母音接続が多数あり、そういう有声子音には -D-, -G- などロマンス語の段階で消失したものや -L- や -N- などガリシア・ポルトガル語の初期の段階で脱落したものなどがあり、最終的に多くの母音接続は15世紀の終わり頃までに解消されたとしても、母音接続の解消の時期を必ずしもある特定の段階に統一的に考える必然性はないが、特に、この②- ii)と③は、いずれも母音間の -N- の脱落によるもので条件が同じなので、おそらく同じ時期にそれぞれ単母音化または二重母音化することで1音節になったと考えるべきであろう。さらにこの問題に関連して、Lorenzo 1988, Carvalho 1989, Sampson 1999らは母音接続が解消される前に④の例のような語末における単鼻母音の二重(鼻)母音化 [ē] > [ēū], [ō] > [ōū] が起きていなければならないとしている。そうしないと、②- ii)のグループで結果的に生じる [ē], [ō] が④の [ē] > [ēū], [ō] > [ōū] の変化に合流して*irmão(女性単数形として)、*bão という形が生成されるはずだからという。⁵⁾ 従って、Carvalho 1989, Sampson 1999などは④のようなタイプで単鼻母音から二重鼻母音が「自発的に」形成されるメカニズムの解明に努力を集中させるのである。語末に位置するこれらの音は [ē], [ō], [ē] のような完全な単鼻母音となっていれば、語末音の長音化、あるいはある種の代償延長のようなものを考えて二重母音に変化したと考えるのはさほど不自然ではないだろう。しかし、④で問題の語末音が [ē], [ō], [ē] でなく、まだ [ēn]~[en], [ōn]~[on], [ēn]~[en] の段階でなんらかの子音要素が語末に残っていたとするならば、必ずしも②- ii)と③との間でのクロノロジーを気にする必要はないのではないかとも考えられる。

Carvalho 1989は、ガリシア語や他のロマンス語の状態などから推定して母音間や音節末のNは先行母音を鼻音化し、同時に軟口蓋音 [ŋ] に弱化したと考えている。従来、語末の単母音の二重母音化(長音化)とされていたもの(以下の I, II, VIII)は、この軟口蓋音 [ŋ] の母音化であり、母音接続の解消(III, IV, V, VI, VII)は軟口蓋音の消失であるという。この軟口蓋音 [ŋ] の設定について Sampson 1999 は根拠が乏しいとして認めていないが、ここでは詳細について特に立ち入らないが、むしろ逆にガリシア語やポルトガル北部の方言データとつき合わせるときわめて有効な仮説である可能性は否定できない。一方、この [ŋ] を認めると、古ポルトガル語における②- i), ④などの例では、それぞれ語末音は [iŋ], [ūŋ], [ãŋ], [ōŋ], [ēŋ] となるわけだから Carvalho 1989 自身が論証の手

続きとして用いている②・ii)と③との間でのクロノロジーはさほど重要でなくなるのではないかという疑問が残る。また、Carvalho 1989 は、ポルトガル語に特有の、語末の鼻母音を表す綴り字の « m » は当時新たにポルトガル語の中に持ちこまれた [w] または [u] (< [ŋ]) を表すための写字生の側の努力の結果ではなかったかという推測を行なっていて興味深い。Carvalho 1989 の主張に従って語尾の変化をまとめると以下ようになる。

- | | | | | | | | |
|-------|-----------------|---|--------------|---|------------|-----------|----------|
| I. | -AN, -ANE, -ANT | > | -ã [ãŋ] | > | -ão [vũ] | | |
| II. | -ON, -ONE, -UNT | > | -õ [õŋ] | > | -õo [õũ] | > | -ão [vũ] |
| III. | -ANU | > | -ã·o [ãŋo] | > | -ão [vũ] | | |
| IV. | -ANES | > | -ã·es [ãŋes] | > | -ães [vĩs] | (> [vĩʃ]) | |
| V. | -ONES | > | -õ·es [õŋes] | > | -ões [õĩs] | (> [õĩʃ]) | |
| VI. | -ANA | > | -ã·a [ãŋa] | > | -ã [v] | | |
| VII. | -ONU | > | -õ·o [õŋo] | > | -õ [õ] | | |
| VIII. | -ENE | > | -en [ẽŋ] | > | -em [ẽ] | | |

変化の順序としては、I と II、及び VIII において軟口蓋音の母音化([ŋ] > [u], [ŋ] > [ĩ])が起きる。先行する鼻母音の後舌性、前舌性によって母音化の結果はそれぞれ [ũ], [ĩ] となる。II の [õũ] は中南部方言では音節主音と音節副音の間で生じた異化により [vũ] となり、I のすでにある [vũ] と合流する。III から VII では母音接続の解消、すなわち母音間の軟口蓋音 [ŋ] の脱落によってそれぞれ右端のような結果に到達する。

2. 写本や揺籃期本における綴りとその解釈

資料体として以下のものを用いた。(ただし、㉑～㉒ではその一部である。)

㉑ アフォンソ II 世の遺言書 Testamento de Afonso II リスボン写本(1214年)

13通作成された遺言書のうち残っている2つのうちのひとつであり、いずれも1214年に作成された原本と考えられている。次の㉒と写字生は異なり、文字使いもちがう。現在ではこの2つのマニユスクリプトは、両者の間に語彙の相違や語順の異同があるため、写字生が原稿にあたるものを前にして筆写したのと考えられている。㉑、㉒についてはファクシミリとの照合も行なっているが、資料としては Castro 1991, pp.197-202. の転写を用いた。

㉒ アフォンソ II 世の遺言書 Testamento de Afonso II トレド写本(1214年)

㉓ 貴族名鑑 Livro de Linhagens do Conde D. Pedro (1280?-1354?)アジュダ写本(A₁, 1380-83?)

テキストの一部は1360-65年に成立していたとされている。この写本はオリジナルに最も近いもので、次の㉒といっしょに装丁されて現存する。装丁は16世紀のものと考えられている。資料はファクシミリエディションから直接転写した。

㉔ アジュダ(歌謡集)写本 Cancioneiro da Ajuda (13世紀末~14世紀初頭)

㉕ ビブリオテカ(歌謡集)写本 Cancioneiro da Biblioteca Nacional (Colocci-Brancuti)(1525-1526)

㉖ ヴァチカン(歌謡集)写本 Cancioneiro da Biblioteca Vaticana (1525-1526)

㉔, ㉕, ㉖は13世紀から14世紀に作られた抒情詩 *cantiga* を伝承するもので、資料はこの3つの写本に共通して現れるものを用いた。㉔が原作に時代的にもステマティカの上でも最も近いが、㉕と㉖もローマの教皇庁で16世紀に作成されたものではあるが、その時参照された元のマニュスクリプトはかなり古い段階の特徴を示していたと思われる形跡があり、より古い言語状態の特徴を引きずっている。これらについて、資料はファクシミリエディションから直接転写した。

㉗ フランシスコ会年代記 *Crónica da Ordem dos Frades Menores*

Fr.Arnaldo de Serrano による *Chronica XXIV generalium ordinis minorum* の中世ポルトガル語訳で、ラテン語のテキストは1369年頃までに成立したとされている。ポルトガル語訳の写本の作成は1470年と欄外に写字生の書きこみがある。翻訳の経緯などは一切不明である。写本はリスボン国立図書館の *Iluminado 94* である。資料はマイクロフィルムからの転写である。

㉘ ヴェスパシアヌスの物語 *História de Vespasiano* (1496年の揺籃期本。出版地はリスボン)

原作は12~13世紀のフランスの *La Venjance Nostre Seigneur* という。言語特徴から推察して1496年の揺籃期本に先行してかなり早い時期にポルトガル語訳が行なわれたらしい。資料はファクシミリエディションから直接転写した。

古ポルトガル語で鼻母音は、たとえば *pimto~pinto~pīto* や *bom~bon~bõ* のように、-m, -n, ~ のいずれかの方法で示される。鼻音性の表記がない場合もあるが、表の例では皆無であった。母音間のNの脱落による母音接続の例は除いた。文献ごとに語末、語中に分けてその割合を示すと以下のようになる。

		㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛
語 中	m	1%	0,9%	8%	8%	9%	8,7%	72%	14%
	n	47%	54%	33%	80%	62%	68%	24%	0%
	~	52%	45%	59%	12%	29%	24%	3,3%	60%
語 末	m	13%	3%	18%	1,6%	14%	16%	89%	14%
	n	48%	84%	8%	92%	39%	37%	0,2%	47%
	~	40%	13%	73%	6%	47%	47%	11%	40%

語中で語源に反する子音連続の現れる割合と例は以下の通りである。括弧は省略表記の展開、数字は生起数、大文字は活用形をまとめたものである。

- Ⓐ 1,1% Coinbria 1
- Ⓑ 3,7% Coinbra 3 enp(er)o 1
- Ⓒ 3,2% amreq(ui)z 1 afom(so) 2
- Ⓓ 3,8% nenbrAR 2 senpre 6
- Ⓔ 1,6% senpre 3
- Ⓕ 1,2% quamdo 1 numca 1
- Ⓖ 55% quinta, ardemte...etc 249 lanpada 1 ponba 1
- Ⓗ 0,9% emcuberta 1

語中と語末に分けて調査の結果を分析すると、まず、語中の鼻音性の表記に関しては、これは①のグループに該当するものであるが、ⒶからⒽまでの数値のばらつきになにか意味を見出すとすれば、Ⓒで「m」の使用率が圧倒的に拡大しているということであろう。これは、語中で語源に反する文字使用の割合のⒸの数値からも確認できることである。その他の点については、「～」を使用することによってどういう意味があるのか明確でないし、また、Ⓓ、Ⓔ、Ⓕは時代的に違っても同じテキストであるということや、Ⓗは言語的にはⒸに先行する可能性があるということに加えて、印刷本であるという特殊事情があるので、この場合の資料として有効かどうか疑問が残るかもしれない。また、ⒶとⒺは、実はポルトガル語としては突出して古いテキストであり、ポルトガル独自の書記伝統が形成される前の資料である可能性もあるので他の資料と同レベルで比べられないかもしれない。文字使用の状況は必ずしも言語の音声事実を反映するものではなく、単なる書記伝統に過ぎない場合の方が多いたのではあるが、仮に、単なる仮定として、文字の使用状況と音声をある程度連結させて考えれば、①のグループで、古ポルトガル語において単鼻母音であったか、それとも鼻音が残っていたのかという問題については、音節末の(鼻)子音のちがいはすでにあまり感じられなかったのではないと思わせるものがある。ただし、これは完全な単鼻母音になっていたということのほか、Carvalho 1989 が仮定しているような音節末の [ŋ] の存在を排除しない。

次に語末の鼻音性の表記については、これは②(i)と④のグループの例にあたるが、この位置では後続する子音に影響を受けないから、むしろ表記そのものは絶対的であるという利点がある。数値は「m」についてⒸでの使用率が圧倒的に拡大するという語中の場合と同じパターンを示している。これは Carvalho 1989 が推測しているように音節末の [ŋ] の母音化の時期と一致する。それ以外の点では、鼻音の表記は文献ごとに差はあるものの「n」と「～」で多かれ少なかれ分担されていることがわかる。8種類の資料のなかでⒸとⒹはテキストの成立と写本が作成された時期が近

接している資料である。こういうタイプの資料の調査をもう少し量的に拡大していくことが必要なのかもしれない。

次に上のデータの中で現れた同一語のバリエーションの例を見てみよう。

Ⓐ アフォンソII世の遺言書 リスボン写本(1214年)

cinque 4 Coinbria 1: Coĩbria 3 demorancia 1: demorãnsia 1 fazam 6: fazã 1 mãdAR 27
poderem 1: poderẽ 1 q(ui)serem 2: q(ui)serẽ 1 Santiago 5 segiã 2 sēpre 2 teem 1: teen 1
teiuere 2 uirem 1: uirẽ 2

Ⓑ アフォンソII世の遺言書 トレド写本(1214年)

cinq(ue) 1: ciq(ue) 1: cĩq(ue) 2 Coinbra 3: Coĩbra 1 d(e)morancia 2 facan 7
mando 1: mãdAR 29 pod(e)ren 2 q(ui)s(er)en 3 Santiago 4: Sãtiago 1 seiam 1: seian 1
semp(re) 1: sēp(re) 1 teen 2 teiuere 1: teiu(er)en 1 uiren 3

Ⓒ 貴族名鑑 (A₁, 1380-83?)

bem 1: ben 1 campos 1: cãpo 2 dom 3: dõ 9 gram 3: grã 1 grandes 1: grãdES 3
leuam 1: leuã 1 q(ue)rem 1: querẽ 1

Ⓓ アジュダ(歌謡集)写本 (13世紀末~14世紀初頭)

andAR 22 bem 1: ben 69: bẽ 1 bon 9 casaren 3 con 11: cõ 1 coração 9
depran 4: deprã 1 dizen 4 en 15 enton 2 fa(z/ç)en 4 gran 32: grã 1 mi 20
mundo 3 nem 1: nen 23: nẽ 3 non 74: nõ 19 nunca 23: nũca 1 p(er)don 5
porem 2: poren 8: porẽ 1 quando 7 quantO 17: quãto 3 quem 1: quen 3
rem 2: ren 23 saben 6 sen 21 sempre 17: senpre 6 tan 16 ten 5 uiren 1

Ⓔ ビブリオテーカー(歌謡集)写本 (1525-1526)

andAR 22: ãdaua 1 bem 5: ben 24: bẽ 31 bon 5: bõ 2 casarem 1: casaren 1: casarẽ 1
con 2: cõ 8: co 1 coraçom 1: coraçon 4: coraçõ 3 depram 2: deprã 3
dizem 2: dizen 1: dizẽ 1 em 1: en 11: ã 1 enton 2 fazen 3: fazẽ 1 gram 17: grã 12
min 1: mĩ 4: mi 33 mundo 2: mũdo 3 nen 9: nẽ 21 non 31: nõ 62
nunca 7: nũca 18 p(er)don 8 po(r)em 1: poren 7: porẽ 2 quandO 6: quãdO 2
quantO 9: quãto 9 quem 1: quen 3 rem 4: ren 6: rẽ 10 sabem 3: saben 1
saberam 1: saberã 1 sen 17: sã 1 sempre 17: senpre 3 tam 5: tan 1: tã 7
tem 2: ten 1: tẽ 1 uyrem 1: uirẽ 2

Ⓕ ヴァチカン(歌謡集)写本 (1525-1526)

andAR 19: ãdaua 1 bem 6: ben 31: bẽ 17 bon 4: bõ 3 casarem 2: casarẽ 1 con 2: cõ 9

coraçom 1 : coraçon 4 : coraçõ 2 deprim 2 : deprã 2 dizem 1 : dizen 3 en 10 : ã 1
 êton 1 : êtõ 1 fazen 2 : fazẽ 1 gram 20 : grã 7 mĩ 5 : mi 45 mundo 3 : mũdo 2
 nen 9 : nẽ 23 non 18 : nõ 65 numca 1 : nunca 9 : nũca 12 perdon 8 : perdõ 1
 po(r)em 1 : poren 5 : porẽ 2 quando 1 : quandO 3 : quãdO 1 quantO 6 : quãto 9
 quem 1 : quen 2 rem 5 : ren 5 : rẽ 8 sabem 5 : saben 1 saberam 1 : saberan 1
 sem 2 : sen 12 : sẽ 1 sempre 13 : senpre 5 tam 1 : tan 7 : tã 4 tem 2 : ten 1 : tẽ 1
 uyrem 1 : uirẽ 2

㉔ フランシスコ会年代記

açemdido 1 : açendido 1 amtre 2 : antre 2 baram 1 : barom 4 çimprez 1 : simp(l/r)ez 2
 com 25 : cõ 7 comtra 2 : cõtra 1 deuotamente 2 : deuotamente 2 emtam 2 : entam 2 : emtom
foram 1 : forom 4 fo(ss/s)em 5 : fossẽ 2 françisquo 33 : françisquo 3 ordem 18 : ordẽ 2
 mandamentos 1 : mandamento 2 : mandamẽto 1 memtes 1 : mentes 1 : mẽtees 1
 mumdo 5 : mũdo 1 nom 12 : nõ 1 opiniã 1 oraçom 2 : oraçõ 1
 quando 6 : quando 2 Religiom 3 : Religiõ 2 tamtO 7 : tanto 1 vinham 1 vinhom 1
 visom 1 : visõ 1 -memte 17 : -mente 19 : -mẽte 0

㉕ ヴェスパシアヌスの物語

bem 2 : bẽ 1 chegarom 1 : chegarõ 1 doença 3 : doẽça 1 em 18 : ã 1 grande 2 : grãde 2
 homem 1 : homẽ 2 jherusalem 2 : jherusalẽ 3 mundo 1 : mũdo 2 mando 1 : mãdado 1
 perguntou 1 . pregũtou 1 santo 7 : sãto 4 tanto 2 : tãto 1 tem 2 : tẽ 1

これらの例では特に㉔で囲みにした、現代語の *barão*, *então*, *foram*, *opinião*, *vinham* にあたる語のバリエントまたは語形が注目される。これは I と II の変化が完了していることを示し、Carvalho 1989 の音節末の [ŋ] の母音化が完了していることを意味するので、㉔での « m » の使用率の拡大と一致するデータである。

次に母音間の -N- の脱落によって生じた語形をあげる。㉔-ii)と㉔に属するのグループである。これらの語形のバリエントに見られる特徴は必ずしも鼻音性が示されるわけではないということである。また、「m」による表記はない。それぞれの資料について、鼻音性の表記がない場合とある場合の数値を挙げた。

㉔㉕ アフォンソ二世の遺言書 (出現回数:リスボン写本 L:トレド写本 T) L 9:9, T 11:8

1: assunar : asuar 1: s'asunar : s'asuar 2: comemorazones : comemoraciones

1: caonigos : conigos 1: dieiros : dineiros 3: moesteiro : moesteiro

4: omees : omees 1: sano : sano 4: una : una

© 貴族名鑑 16:6

alemaes 1 algũa 1 boõ 1 boos 1 c(hri)staaes 1 c(hri)staaos 5 (chri)staaos 3 coraçoos 2
asperooes 1 omees 1 eseroes 1 hũa 2 uã 2

① アジュダ(歌謡集)写本 3:17

auẽo 1 bõa 3 boa 3 boã 2 uã 11

② ビブリオテカー(歌謡集)写本 5:14

auẽo 1 bõa 2 boa 5 boã 3 hũa 2 huã 1 hunha 4 uhã 1

③ ヴァチカン(歌謡集)写本 5:15

auẽo 1 boa 4 boã 4 bona 2 huã 2 hunha 4 ua 1 uhã 1

④ フランシスコ会年代記 19:18

algũa 1 algũuas 1 alguuãs 1 alguuas 1 barooês 1 barooes 1 booa 1 boos 1
espiracooês 1 huũa 1 hua 2 huua 9 hũas 1 huuas 1 jrmãõ 1 jrmaõ 1 jrmaa 2
mãõs 2 maõs 1 oraaçoõeês 1 Rep(ar)aaçoõeês 1 reuellaçoõeês 1 Reuellaçoõeês 1
tr(i)bulaçoõeês 1 tr(i)bulaçoõeês 1 visooes 1

⑤ ヴェスパシアヌスの物語 1:17

algũas 4 boa 1 boõ 1 hũa 4 maõ 2 nẽhũa 2 poẽ 1 saõ 3

なにかの結論を導くには絶対数が少ないかもしれないが、これらの語形について、©と④の資料で問題の語尾を表記するのに母音字が複数用いられていること、また鼻音性の表記は©では少なく、④で半々となり、鼻音性の、表記に対する反映が拡大しているらしいということがわかる。母音接続が解消されることによって結果的に単鼻母音から二重鼻母音へと鼻音性のものが拡大したことと、この表記上の変化の間に関連があるかどうかは資料の調査をもう少し量的に拡大してみないとわからない。また、④では同じ語のバリエーションの数が多くなっているようにも見える。果たして、進行中の変化となんらかの関連があるのだろうか？

註

1)ポルトガルのポルトガル語では、鼻母音として、単鼻母音の [ĩ] / [ẽ] / [ẽ̃] / [õ] / [ũ] と二重母音が鼻音化した二重鼻母音の [ẽ̃̃] / [õ̃̃] / [ũ̃̃] の4つが対立する。ブラジルのポルトガル語ではこれに [ẽ̃̃̃] が加わる。歴史的には、ブラジルの体系が古く、ポルトガルでは19世紀初頭にかけてリスボンを中心とする地域で [ẽ̃̃̃] > [ẽ̃̃̃̃] が生じ、もともとあった [ẽ̃̃̃̃] と合流してしまった。

正字法では、次に母音字が後続しない *m, n* やティル *til* と呼ばれる波型の記号を母音字の上に置いて鼻母音を示す。二重鼻母音が現れるのは *cáibra* [ɥ̃], *muito* [ũ] などの例外的な語を除くと語末の音節に限られている。それぞれの二重鼻母音に対応する正字法上の綴り字は «-ão(-), -am» [ɥ̃], «-ãe(-), -ãi-» [ũ], «-õe(-)» [õ], «-em, -en-» [ɐ̃] (ブラジルの [ɛ̃]) である。([ũ] はこの音を有する語が *muito* と *mui* だけなので固有の綴り字を有しない。)

2) ポルトガル語の時代区分やその名称などについては Mattos e Silva 1991, pp.19. を参照。本論では古ポルトガル語と近代ポルトガル語という二つに分ける区分を採用しているが、それをさらに下位区分する見方もある。その場合、言語的な、すなわち音韻史上の出来事だけでなく、文学史的な配慮も介入することは避けられない。近代ポルトガル語の出発点として、1536年とするものと、16世紀半ばということで便宜的に1550年とするものがある。1536年というのは、この年にポルトガル語最初の文法書が出版されたことや、大学が最終的にリスボンからコインブラへ移ったこと、前世紀的な言語を引きずっている、戯曲作家の Gil Vicente の最後の劇の上演があったとか、プレ・ルネッサンスを代表する知識人であった Garcia de Resende が死んだ年であったというようなことになぞらえた表現である。

3) Mattos e Silva 1991, pp.69-70.

4) *pão, bem* のような語について、古ポルトガル語における綴り字のバリエーションから PANEM > pane > pãe > pã, BENE > bene > bẽe > bem などのような変化が立てられることがあるが、Lorenzo 1988, pp.295-296. が指摘しているように、あまり適切とは言えない。スペイン語とも共通の語末の *-e* の脱落と、ガリシア・ポルトガル語に特徴的な母音間の *-n-* の脱落では前者が先行するものと考えられるからである。

5) この相対的クロノロジーの問題については実際にはかなり古くから気づかれていて、たとえば次の Leite de Vasconcellos 1926, pp.145-146 の説明のなかにも読み取ることが出来る。

	1	2	3	4	5	6
época A (lat. vulg.):	-ONE	-VDINE	-ANV	-ANE	-ONV	-ANA
época B (prè e proto-hist.):	*-õe	-õe	-ão	*-ãe	-õo	-ãa
época C (até o séc. XIV):	-õ	-õe, -õ	-ão	-ã	-õo	-ãa
época D (séc. XIV-XV):	-õ, *-õo	-õe, -õ, *-õo	-ão	-ã	-õo, -õ	-ãa, -ã
época E (séc. XV-XVI em diante):	-ão	-ão	-ão	-ão	-õ	-ã

「なぜ *pã* や *razom* が *pão* や *razão* に変化したのか？ 別な言い方をすると、なぜ *-ã* と *-õ (-om)* が *-ão* となったのか？ 思うに、ある時期に音節末で鼻母音の *-ã* と *-õ* が耳障りに感じられるようになり、それが支えの、あるいは強調的延長による母音 *-o* をとるようになったことから、*-ão* と *-õo* が生じた。

(今日でもなお人々の口から *fīe*, *túe*, *péi* などが聞かれるのはまれではない) つぎに *-ōo* が *-ão* に変化する。これは異化によるか、あるいは *-ANV* と *-ANE* からくる名詞の語尾の *-ão* との混同によるか、それとも自然発生的なものかのいずれかである。*-ōe* に終わる名詞は *-ō* となる。なぜならば、複数の語尾の *-ões* は、これらの名詞と *-ONES* からくる名詞において同じであるから、同じ語尾を引き起こすのである。*razões* には *razō* が対応するので、*multidões* には *multidō* が対応させられる。それに続いて *multidō* は *razō* と同じ道をたどって *multidão* になる。しかし、*pā* が *pão* に、*razō* が *razão* に変化したのに、なぜ *lā* が *lão* に、*bō* が *bão* にならなかったのかという疑問が生じるであろう。それは *lā* は *lāa* < *LANA-* から、*bō* は *bōo* < *BONU-* からくるもので、*pā* が *pão* に、*razō* が *razão* に変化した時代にはまだ *lāa* と *bōo* は *lā* と *bō* に変化していなかったので *pā* と *razō* に合わせて変化することはなかったのである。」(同書145-146ページ脚注2)

引用文献

- Carvalho, Joaquim Brandão de. (1989). *L'origine de la terminaison -ão du portugais: une approche phonétique nouvelle du problème*. Zeitschrift für romanische Philologie 105, pp.148-160.
- Castro, Ivo (1991). *Curso de história da língua portuguesa*. 278 pgs. Lisboa: Universidade Aberta.
- Lipski, John M. (1973). *On the Evolution of Portuguese '-ão'*. Vox Romanica 32/1, pp.95-107.
- Lorenzo, Ramon. (1988) *Consideración sobre as vocais nasais e o ditongo -ão en portugués*.
In: D. Kremer (ed.) (1988) *Homenagem a Joseph M. Piel por ocasião do seu 85.º aniversário*. pp.289-326. Tübingen : Niemeyer.
- Mattos e Silva, Rosa. (1991). *O português arcaico, fonologia*. São Paulo: Editora Contexto.
- Sampson, Rodney. (1983) *The origin of Portuguese -ão*. Zeitschrift für romanische Philologie 99, pp.33-68.
- Sampson, Rodney. (1999) *Nasal Vowel Evolution in Romance*. New York : Oxford.
- Teyssier, Paul (1984). *História da língua portuguesa²*. 113 pgs. Tradução de Celso Cunha.
Lisboa: Livraria Sá da Costa Editora. (Título original e a primeira edição: *Histoire de la langue portugaise*. «Que sais-je?» n° 1864. Paris: PUF. 1980.)
- Vasconcellos, José Leite de. (1926) *Lições de filologia portuguesa*. 2.ª edição melhorada.
Lisboa : Biblioteca Nacional.